

9640

1

一
鉄

鋼

1729

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

一鋼材

年次	設備能力	實產高
十三年	六一三〇	四七八〇
十四年	六九五〇	五五六〇
十五年	七五九五	五九一〇
十六年	八七一五	六七二一

(單位 千應)

註、十三年一月一八月実績二六〇千應

企 畫 院 案

(單位 千應)

年次	現在能力	設備目標	實產額
十三年	七八五四	六六八三	五二四三
十四年	八四四四		(五二二三)
十五年		一〇〇一九	
十六年		一一二二八	九七〇〇

註、() 内物動計畫所載「總供給額」

一 鋼 塊

(單位 千噸)

年次	設備能力	生国内生産高	産滿洲国輸入分	高合計
十三年	六五七二	五八二七	鋼片 一一三	五九四〇
十四年	七五四二	六六〇九	一一一	六七二〇
十五年	七九九二	七一三五	一三四	七二六九
十六年	九九七五	八〇一一	四五〇	八四六一

本年度滿洲国ノ對日供給額ハ鋼片一五万噸ノ豫定ナリシモ、最近迄ノ実績ハ約七・五万噸ニテ、残り七・五万噸ニ就テ八年内半分タケ輸入スルコトニ決定セリト言ハル。ヨツテ右ノ如ク計上セリ。

昭十一実産額		昭十二以降増設分		建設及計畫中	
日鉄	計 二七二六千噸 能力 二七九〇	第二次完成後 鋼塊能力 三三九〇千噸 鋼材能力 二七一〇	第三次完成後 三八九〇千噸	第四次完成後 四三九〇千噸	第五次完成後 四三九〇千噸
計 一七九二千噸 能力 二二三〇	計 二四五八千噸 能力 二六一二	日本鋼管 (二二二) トーマス爐 (三三六)	一四四〇〇〇噸 三〇〇〇〇〇	日本鋼管 (五二六)	一八〇〇〇〇噸
計 二五二九千噸 能力 二七九〇	富永鋼業 (三三二) 日本亞鉛鑛 (三三七)	一五〇〇〇〇 一三三〇〇〇	中山製鋼 (七〇三)	二二五〇〇〇	大谷製鋼 (五〇三)
	尼崎製鋼 (四〇三)	四八〇〇〇	鶴見製鉄 (六〇三)	一九八〇〇〇	

大阪製鉄	四〇×二	九〇〇〇〇	
川崎造船	七〇×	七五〇〇〇	
吾嬬製鋼	四〇×	四八〇〇〇	
小倉製鋼	四〇× 三〇× 二〇×	九〇〇〇〇 六〇〇〇〇	小倉製鋼
矢作製鉄	三〇× 二〇× 一〇×	一七〇〇〇	朝鮮理研金屬 キルン×
日本砂鉄工業電	一〇〇× 二〇× 三〇×	一〇〇〇〇 一〇〇〇〇 一〇〇〇〇	日本特殊鋼管
			四〇× 三〇× 二〇×
			一七〇〇〇〇
			日本砂鉄工業電
			一四〇× 一〇× 七〇×
			七〇〇〇〇

企 業 院 案

(單位 千 圓)

年 次	設 備 目 標	實 產 額
現 在 能 力	六 五 八 三	五 九 七 四
昭 三 十 三 年	八 三 五 一	(七 〇 一 六 五 八 八 三)
十 四 年	八 九 五 一	七 九 九 七
十 五 年	一 一 三 八 六	八 九 八 九
十 六 年	一 二 六 六 一	一 一 〇 四 一

註、() 内 物 動 計 登 所 載 「 總 供 給 額 」

一 銑 鉄

(單位 千噸)

年 次	設 備 能 力			生 産 高		
	内外地実産高	北支輸入分	滿洲国輸入分	合 計	内外地実産高	北支輸入分
十三年	四二〇〇	一	一五〇	三三三〇	三三三〇	一
十四年	五二六八	六〇	七五九	四〇〇〇	四八一九	六〇
十五年	五五四八	八〇	七四〇	四七四三	五五六三	八〇
十六年	七五九九	一〇〇	一一〇〇	五九八三	七一八三	一〇〇

註、十三年一月―八月実績二五二九千噸

ニ各製鉄所ハ輸入鑛石窮屈且又コークス用炭不足ニテ出銑率ノ低下ヲミ
タルモ、鑛石ハ貯藏分(相當豊富)ヲ使用シ、製銑能力ノ増加ニ伴ヒ
テ絶對額ニテハ相當ノ実績ヲ擧ケ得タルモノノ如シ。
北支ヨリハ、最終現地案ニヨレハ、年内四万噸ノ對日輸出ヲ豫定セ
ラレタルモ、石景山製鍊所ノ火入レハ豫定ヨリ遙カニ遅レ十二月ニテ

7

ルカ如キ有様ニテ本年度ハ期待シ得ス。明年度ハ石景山先ツフルニ稼
行スルモノトシテ年産八万應、又下期太原モ稼行ニ至ルモノトシテ約
一万應、コノ中六万應ハ對日輸出ニ振向ケラルルモノト推定セリ。
滿洲国ヨリノ輸入ニ就テハ同国修正五ケ年計畫ヨリ、同国製銃ノ進
捗其他ヲ參酌シテ右ノ如ク訂正シテ計上セリ。尙本年度ハ年初二〇万
應ノ計畫ノ處実績ハ豫定ノ半額ニ達シタルニスキス、今後本年中残り
一〇万應ノ中、半分タケヲ輸入スルコトニ日滿當局ノ諒解ナリタリト
言ハル。ヨツテソレヲトレリ。

一 熔 鑪 爐		昭十一実産額	昭十二以降増設分	建設及計畫中
日 鉄	計 二〇四二 能力二一五〇	千 噸	八幡 (二・三) 一〇〇〇 × 一 三三〇〇〇〇 " (三・四) 一〇〇〇 × 一 三三〇〇〇〇 輪西 (二・一〇) 三三〇 × 一 一一三〇〇〇 兼浦 (二・一〇) 三三〇 × 一 一一三〇〇〇 釜石 (三・二) 七〇〇 × 一 二四三〇〇〇	年産能力 噸
	第一次完成後 能力二七五〇 第二次後 三三五〇 第三次後 四〇五〇 第四次後 四七五〇 第五次後 六一五〇	千 噸	八幡 三〇〇 × 一 三三〇〇〇〇 輪西 (四・二) 七〇〇 × 一 二四三〇〇〇 " (六・春) 七〇〇 × 一 四八六〇〇〇 廣畑 (四・一〇) 一〇〇〇 × 一 三三〇〇〇〇 " 一〇〇〇 × 一 三三〇〇〇〇 清津 五〇〇 × 一 三三〇〇〇〇	年産能力 噸

		社外	
		計	能力
		一八三	二七〇
		千	
		鶴見製鉄	日本鋼管
		(二七) × 二五〇	(二六) × 四〇〇
		一三三〇〇〇	一五八〇〇〇
		小倉製鋼	中山製鋼
		(二二) × 三〇〇	(二二) × 三〇〇
		一三三〇〇〇	一〇二〇〇〇
		日本特殊鋼管	
		(一〇) × 三〇〇	(二) × 五〇〇
		一〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇
		日本鋼管	小倉製鋼
		(二六) × 六〇〇	(二二) × 三〇〇
		二四〇〇〇〇	二四〇〇〇〇
		中山製鋼	小倉製鋼
		(二六) × 四〇〇	(二二) × 三〇〇
		一四六〇〇〇	一三三〇〇〇
		清津製鋼	大谷製鋼
		(二六) × 四〇〇	(二六) × 六〇〇
		七五〇〇〇	二一〇〇〇〇
		ホルン	浅野セメント
		(二二) × 三〇〇	(二二) × 三〇〇
		七五〇〇〇	七五〇〇〇
		入	磐城セメント
		三〇〇〇〇〇	(二二) × 三〇〇
		三〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇
		大阪窯業セメント	
		(二六) × 六〇〇	
		二〇〇〇〇〇	

三 (イ) 近來セメント製造會社カ業界始ツテ以來ノ高率操短 (註一) ニ惱ミ
 ソノ轉換ヲ策シツツアリシカ、先般來各社競ツテ休轉窯ニヨル銑鉄製
 造ノ計畫ヲ進メ、數社ハステニ、試驗窯ニヨル実験ヲ終了シ、本式ノ
 回轉窯ニヨル実験ヲ行ヒツツアリト言ハル。今日ノ事態下ニアツテハ
 ソノ企業化ノ成功一日モ早カラントヲ祈ツテ止マス。(註二)

會社名	計 畫
大阪窯業 セメント	十月十八・十九日ノ工場試験成功、原料硫化鐵滓 第一次計畫 三窯 年産 二〇〇〇〇〇
秩父セメント	十月四日ヨリ本格的試験施行中
磐城セメント	四倉工場 附近ノ磁鉄礦ヲ以テ実験中 湊工場 砂鉄ニヨル実験近ク開始
宇部セメント	硫化鐵滓ニヨル実験準備中
淺野セメント	本格的実験準備中
小野田セメント	本格的実験準備中

註(一) セメント生産制限率月別表

十三年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月
生産制限率 (%)	六五・〇	六五・〇	六三・〇	六一・五	六一・五	五九・〇	六一・〇	六一・〇	六四・〇	六六・〇	六六・〇

註(二)問題ノバツセー法ハスパインノアスラント會社ニ於テ成功、企業化サレタルモノナルモ、ソハ同社工場ノ立地條件ハ極メテ有利ニテ鉄鑛山、石灰石、粘土山ヲ近クニ具ヘタルニヨルモノナリ。從テ我カセメント諸會社ニアツテハ鉄鑛石ノ取得條件極メテ重大ナル問題ナリ。コレニ関シテハ適當ナル政府ノ成助必要ナリト思料ス。

(四)乾式銅製鍊所ノ熔鑛爐鑛滓カ多分ニ鉄分ヲ含有スルコトニ就テハ、兼テヨリソノ回收問題トナリ居レルカ、先般京大齋藤博士、阪大松川博士ニヨツテソノ研究公ケニセラレタリ。(日本鑛業會九州鑛山學會大會ニ於ケル講演、日本鑛業會誌十三年七月号)

我国主要鑛製鍊所ノ昭和十年年度ニ於ケル鑛滓ノ中ニ含マルル鉄及ヒ亞鉛量ハ次表ノ如シ。

製鍊所	1		2		3		4	5	6	7	8
	年	日	年	日	年	日					
	二六七五〇	七六五	三九・四〇	一〇五四九三	三〇一	一・五三	四〇九六	一一・七			
	九一四五〇	二六一	四〇・三五	三六九〇二	一〇五	三・七八	三四五七	九八			
	四二一・一五九	一二〇三	二二・五九	九五・一三九	二七一	一・〇九	四五九〇	一三・一			
	四九六七一	一四一	二九・三二	一四五六三	四一	一・三四	六一五	一・七			
	九〇六二一	二五八	二六・七七	二四二五九	六九	一・三〇	一一七八	三・三			
	四七六六三一	一三六一	一九・八六	九四六五八	二七〇	一・四五	六九一一	一九・七			
	三〇〇八七	八五七	二四・一一	七二三五〇	二〇六	三・〇〇	九〇〇二	二五・七			
	五一三〇三	一四六	三〇・一九	一五四八八	四四	五・一四	二六三六	七・五			
	四二八七一	一二二	四一・三八	一七七四〇	五〇	二・三四	九六〇	二七			
				四七六五九二	一三五七		三三四四五	九五・二			

(單位 應)

「此處ニ示ス八製鍊所ノ外ニ内地ニ五製鍊所又朝鮮ニ二製鍊所アリ、且今日テハ各製鍊所ニ於テモ可ナリ増産セラレテ居ル爲ニ鑛滓ノ量モ増加シ、之ニ含有セララル鉄ノ量モ恐ラク一日ニ二、〇〇〇應ヲ下ラナイテアラウト想像セラレル。」「研究ノ結果之ヲ回收シテ優良ナル鑛造用銑鉄ヲ製造シ得ルコトヲ確カムルコトカ出來タ。」（齋藤博士松川博士前掲論文）亞鉛ノ含有量又極メテ多ク、亞鉛ノ回收モ亦可能ナリト言ハル。之ニ對スル適切ナル施設、政府ニヨツテ早急ニ行ハルルコトヲ望ンテ止マス。

（單位 千應）

年次	現在能力	昭十三年	十四年	十五年	十六年
設備目標	三二二二	四四〇九	五三四三	七〇一三	七六六三
実産額	二五〇九	三三〇〇 (三三〇〇)	四五一五		七五二三

註、（ ）内物動計畫所載「總供給額」

15

内地鉄鑛山、日鉄開發計畫中ノ主要鑛山ハ次ノ如シ。

年次	内地		朝鮮		合計
	茂山	瑞川其他	茂山	瑞川其他	
十四年	1000	2000	5000	2000	8000
十五年	2000	3000	5000	3000	20000
十六年	1800	3000	3000	1500	6300

ニ鉄鑛石各年増産分

(單位 千噸)

年次	生産高		
	北中支輸入分	硫化滓	鉄鑛石
十三年	2215	480	1650
十四年	3705	600	2450
十五年	6105	700	4450
十六年	7480	850	5080

一鉄鑛石

(單位 千噸)

三

年次	北支輸入	中支輸入	合計
十三年	五五	三〇	八五
十四年	一〇五	五五〇	六五五
十五年	一三五	八二〇	九五五
十六年	一五〇	一四〇〇	一五五〇

(單位 千應)

他ニ於テ多少ノ増産ヲ期待スルコトヲ得。

茂山ノ鉄鑛ハ精鑛ニ換算シテ計上セリ。朝鮮ニ於テハ三菱ノ瑞川其

鑛山名	開發計畫
新潟・赤谷	十四・八月出鑛豫定 年産 一五〇千應目標
福島・庭坂	十四・八月出鑛豫定 年産 八〇〃〃
北海道上喜茂別	十三・十月出鑛豫定 年産 八〇〃〃

本年度北支ヨリノ輸入ハステニ積出スミノ分ヲ合セテ龍烟鉄鑛石五
 五千噸ト推定セリ。明年ハ金嶺鎮鑛石ヲモ合セテ約一〇五千噸ト推定
 ス。中支ハ華中鉄鑛公司ニヨル開發進捗中ナルモ、本年度ハステニ積
 出スミノ馬鞍山ノ貯鑛三万噸ノミトミタリ。華中鉄鑛ノ目標トスル所
 ハ五ヶ年後五百万噸ト稱セラルルモ到底カカル産出ハ不可能ナリト思
 料ス。大冶鉄鑛ハ悉ラク明年末頃ニハ日本向搬出ノ運ヒニ至ルヘク、
 尙現在蕪湖ニ貯鑛約七万噸、或ハ大冶江岸ニ貯鑛二〇万噸アリト言ハ
 ルル分ハ船腹都合ツキ次第積出ス豫定ト稱セラル。ヨツテ右ノ如ク推
 定セリ。

要スルニ、鉄鑛資源ハ極メテ貧弱ニテ、巨額ノ不足分ハ之ヲ第三国
 ニ仰クコトトナル。之カ對策トシテハ或ハ石原産業、日本鑛業等ノ南
 方鉄鑛山投資ニ對シテハ国家ニ於テモ充分之カ保護ニ當リ、又極力比
 島鉄鑛等ノ輸入ニ努メサルヘカラス。

硫化滓ニ関シテハ前掲ノ如ク相當多額ノ数量ヲ豫定セルモ、別掲（
 銑鉄ノ部）銅熔鑛爐鑛滓ノ問題モ之ニ關聯アリ、廣ク硫化鉄鑛ノ燒滓

註、(一)内物動計畫「總供給額」

年次	設備目標	實産額
現在能力	二二八〇	一八九一
昭十三年	三二七〇	(一六五〇)
十四年	四七二〇	
十五年	六六〇〇	
十六年	七五三〇	七五三〇

企 畫 院 案

(單位 千應)

ニツイテ完全ナル利用方法ヲ攻究、実施スル必要アリ。